

朝妻舟讚考

朝妻舟讚、隆達がやぶれ菅笠しめ緒の、かつらながく

伝わりぬ是から見ればあふみのや

あだしあだ波、よせてはかへる浪、朝妻船の浅ましや、あゝまたの日は、(一本二夜二作ルハ非ナリ)たれに契りをはして、色を、枕はづかし、偽がちな  
る我とこの山、よしそれとても世の中

北窓翁一蝶画讚

【右の文、世にうつし伝ふる所、あやまり多し、  
今柳塘館所蔵をもて、うつし出す】

一蝶若かりしとき、友人なるひと、都よりのつとにとて、也足軒通勝卿、船中妓女といふ題にて、このねぬる、朝妻船の、あさからぬ、ちぎりを誰に、またあかはすらん、と自遊したる短冊を得させしを、よろこびて秘蔵せしが、ある年近江の彦根にいたり、いゝかしこ名所見めぐりけるうちに、朝妻【近江国坂田郡】の古跡にめぐまり、通勝卿の詠歌を思ひ出して、懐旧の余り、やがて彼朝妻船のかたを画き、且朝妻船といふ小歌をつくりけるとなむ。

其角が句に、柳には鼓もうたず歌もなし、五元集にあり、是も一蝶が画の讚なるべし、其後某侯の御まへに陪して、市川検校【神田鍋町】が、いとに合せて、一蝶みずから、これをうたひけるとかや、彼朝づま舟の絵に付ては、あらぬ事どもを、云伝ふるといへども、元来のそら言也、人の見しりたる、船のうちに、くゞつめの烏帽子水干着たるかたをば、一蝶晩年にかきたり、始めは只小舟の内に、烏帽子つゞみなど、取ちらしたるさまを書けるとぞ【以上、一蝶がながれをくむ、某のかたり伝へたることとて、自ら筆記せる説なり、此説あきらかにして、且尽したりといへども、是に付て、いさゝか、予が考を下にあらはす。案二通勝卿の歌に、もとづきしのみにあらず】

六百番歌合、寄遊女恋、後京極院摂政、「誰となく、よせてはかへる、浪枕、うきたる船の、あともとゞめず」

新統題林雑下、岸頭傀儡、実蔭卿、「あだ波の枕さだめぬ、河岸に、たれとまれとか、まつ陰の宿」是等の歌にも、思ひよりたらん鳥籠トリカゴの山は、近江の名所にて、多く床よせて歌によむ、故にいつはりがちなる我とこの山とは書たらん、元禄の比までは、隆達ぶし残りたれば、一蝶よくてこれをうたひ、且小歌の文をも、あまたつくれる中に、朝妻舟、しのゝめ【一名かやつり草】などいふは、殊にはやりて、其頃のたはれを等が、もはらうたひし小歌なり、其故に元禄十六年印本、松の葉といふ音曲本、朝妻舟の文を、端歌の部に載て四段あり、其文左の如し

朝妻舟

あだしあだ波、よせてはかへる波、朝妻舟のあさましや、あゝまたの日は、誰に契をはして、色を、枕はづかし、いつはりがちなる我とこの山、よしそれとても世の中、「うきねつらさのまつち山の風、夕こえくれてさゝを舟、あゝさだめなや、とこの浦波、夜なき千鳥ノ、たえぬ思ひに月日をおくるも、あだ人心、よしあふまでのうつり香、あだしあだ波、身はうき枕、ならはぬほどのこの露、あゝ幾度か袖にあまれる涙の色を、あゝ袂の色を、みねのみみぢば、ひとりこがれて枕の涙、あはれと人のとへかし、うきをかたらん友さへなくて、なぐさみかねつ我心、あゝうつゝなや、過しつたへのその水茎の、くろみしあとを見るにつらさの、いやます涙は、誰故ぬるゝ、あはれとそでもとへかし

右之文を案に、隆達が小歌の調にならひてかけるものなり、右の小歌世に行れたるゆゑに、はじめの段をかきて、絵をそへたるならん、一蝶自作の四季絵跋といふものに、若かりし時、あだしあだ波のよるべに迷ひ、時雨朝がへりのまばゆきをいとほざる比ほひと書るものは、小歌をうたひつゝ、遊びがもとに通ひし、若ざかりを思ひいでゝの文なるべし【端書は、絵をそへたる時、別に作りたるものと見えて、寛文十二年印本、糸竹初心集にのせたる小歌に】すげ笠ぶし、やぶれすげ笠、やんや、しめをがきれていの、おゝゑい、さらにきもせず、ゑいさんや、やあさんさ、すてもせず、かくあるは隆達ぶしの小歌なり、寛文の比、三味線にも、一節切にも、合せて、もつはらうたふ、かの端歌に、隆達がやぶれすげ笠、しめをのかつら、ながく伝はりぬと書たるは、右のすげ笠ぶしの、長くつたはりたることをいへるなり、すげ笠は、近江の名産なるによりて、これからみれば、近江のやとはつゞけたらん、隆達は、慶長のころ、泉州堺に住し、小歌の名人なり、其伝予が骨董集につまびらかなり、一蝶作の小歌は、多く花都といふ盲人ふしを付たり、しのゝめといふ小歌も、松の葉に、武州花都作と有、これふし付をせし事なり、文を作りたるひあらず、再案に、蕉尾琴に、あさづま舟に鼓を入れて、月を見侍る女の水干に扇かざしたる絵にと書て、思ふ事、なげぶしは誰、月見船、其角【是等も一蝶が絵の賛なるべし】

\*この「朝妻船譜考」は山東京伝の『近世奇跡考』（文化元年（1804）刊）と同文